

岩井 眞實著

近代博多興行史

地方から中央を照射する

演劇は、究極的には、ある一定の時間、特定の「場」を共有する創作者と観客との関係性のなかにのみ存在し、生み出された側から消えていく。後から振り返って、そのような存在を具体的に記述し、分析していくためには、多くの資料を用い、多角的な視点を持つことが必須である。さういふ博多における演劇に、演劇が興行として、芸術的な意図だけでなく、多様な立場の人々の、さまざまな思惑が交錯する状況のなかに立ち現れている時、その実態を解明することは、複雑に纏れた糸を解きほぐすかのような難事業となる。

岩井眞實『近代博多興行史 地方から中央を照射する』は、明治期の博多という都市における、

字術読物

きていたことの詳細を知ることにも困難が伴うが、それと同じく、あるいはそれ以上に、観劇に必要な諸費用や俳優に支払われた出演料、その他劇場の建設・運営や興行に

を詳にすることは難しい。「カネ」の問題にも、常により配りを忘れないし、大阪や京都から博多に來演する歌舞伎の一座やサービスの実態、舞台

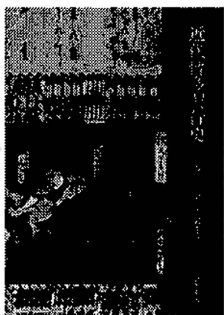
えに他の劇場で製作された大道員を借りることには原則できないと説明した上で、明治二八年(一八九五)の川上一座來博時

には博多独自の劇場文化が花開いていたことがわかる。さらに、たびたび記される大阪・京都から中国・九州へと広がる他の興行地との関係などからは、明治期には、そうした地域独自の多様な演劇文化が博多のみならず各地に存在したことが実感される。そこには、新

演劇を生む「場」を解き明かす労作

明治期博多における劇場の消長、興行の歴史、「カネ」の問題

日置 貴之



A5判・592頁・19800円
文化資源社
978-4-910714-01-1
TEL. 03-3557-3408

彩な演目に対応できる大量の衣裳を運搬したか、博多での興行が始まってしまっただけで、という事情を語った。このように、「見てき

明治期の博多における劇場の歴史について、著者は教楽社や永楽社など、(社)を名乗る劇場の時代、明治三六年(一九〇三)開場の明治

「こからさらに九州全域や、台湾など「外地」を日本演劇研究

で用いられる衣裳や道具が、どのように作られ、誰の所有に帰するものであるのか、といった事実

曲の翻訳などもおこなってきた著者の面目躍如たるところでもあり、近代博多の興行に関わった武田一族の末裔である武田政子氏からの聞き取りに

は、日本の「近代」という時代を考える上で重要な示唆があるだろう。『芝居小屋から』(ひおき・たかゆき)明